

猫を待つ

キクチイサオ

人物

清野明子 (18) 高校三年生

渡部未咲 (18) 高校三年生

天野俊二 (18) 高校三年生

美原楓 (28) 音楽教諭

日比野智子 (28) 養護教諭

山羊髭の店主 (68) レコード店店主

○街ビルの陰にある自販機の前

ゴトン、と缶が取出口に落ちる。

清野明子（18）、クリームコーンスー

プの缶を取り出す。高校の制服姿に、

目深にニット帽をかぶっている。

○飲食店の並ぶ細い通り

水商売の店の看板が並んでいる。おし
ぼり業者のおっちゃんが車の荷物をス
ナックの店内に運び込んでいる。

明子、クリームコーンをちびちび飲ん
で温まりながら歩いてくる。通りしな
に、ドアの開いているスナックの店内
になんとなく目をやる。

ママらしき中年女性とおしぼり業者の
おっちゃんが談笑している。

ママ、タバコのけむりを細く吐きなが
ら、チラッと目を向ける。

明子、サッと目を戻して、足を速める。

○中古レコード店・外

街ビルの並びにある年季の入った店。

『レコード買います』『中古CD一割引』などの色褪せた貼紙の中に、最近書いたばかりの『アルバイト募集』の貼紙。

○同・店内

明子、レジ横の椅子に座って、そわそわと店内を見回している。

客はいない。品揃えにこだわりはなく、過去に流行ったCDやレコードが適当に並んでいる。商売っ気はない。

山羊髭の店主（68）、店の奥から出てくる。派手なニット帽を頭に乗せ、缶コーヒーを二つ持っている。

店主「どっちがいい？ 甘いのと苦いの」

明子「あ。大丈夫です」

店主「若い人は飲まないか。コーヒーは」

明子「いや。……じゃあ甘いので」

店主「はい（と缶コーヒーを手渡す）」

明子「いただきます（と椅子から少し腰を浮かせて、両手で受け取る）」

店主、椅子に座って、にんまりする。

店主「採用」

明子「えっ？」

店主「乾杯しましょう」

明子「あ……はい」

二人、缶コーヒーを開けて、乾杯する。

店主、一口飲む。明子、それを見て、

一口。店主、その後も黙ったまま、のんびりと飲み続ける。明子、戸惑いながら、ふと思いついて、バッグから履歴書を取り出す。

明子「あの、これ、履歴書です」

店主「ん？ ああ、大丈夫よ、もう」

明子「……はい」

店主「最近の缶コーヒーって、よく出来てるよね。ちゃんとコーヒーだよね」

明子、履歴書をしまいながら、じわり

と頬がゆるんでくる。

ぐっと缶コーヒーを飲む。店主のかぶつている派手なニット帽に目が行く。ふと気がついて、自分のニット帽を取る。短く切り過ぎた前髪を気にして、ササッといじる。

店主「平日の午前中なんだけど大丈夫？」

明子「はい」

店主「高校生でしょ？」

明子「大丈夫です」

店主「ダメよ、学校休んじゃ」

明子「三学期はほとんどお休みなので。みんな家で受験勉強するから」

店主「ああ、そうなの」

明子「私は受験しないので」

店主「就職するの？」

明子「はい。就活中です」

店主「大変だね。あ。あたしの知ってる所で

ね、募集してますよ。何人か」

明子「そうですか」

店主「事務員だったかな、小さな印刷会社の。

嫌だよねえ、そんなの」

明子「いいえ、そんなことないです」

店主「そう？ その気があるなら話してみま

しょうか。知ってる人だからね、悪い人じゃないよ」

明子「はい」

と、少し笑ったまま、頬がこわばる。

缶コーヒーを飲もうとして、やめる。

○高校・三年生教室・中

黒板に『就職講座』と書かれている。

十人ほどの生徒がぼつんぼつんと席に座り、机に顔を落としている。真面目に書いている生徒、やる気なくコソコソ喋っている生徒、居眠りしている生徒。

渡部未咲（18）、窓辺の席に座って、メガネをふいている。メガネをかけたおとして、窓の外を見る。

日当たりの良いベンチが見える。
未咲、頬杖をついてベンチを見ている。
ベンチには誰もいない。下校する生徒
たちがベンチの前を通り過ぎていく。
未咲、メガネを外して、机の用紙に目
を落とす。

『就職希望者用面接練習シート』。長
所、短所、希望の職種……空欄のまま
ペンの先が素通りしていく。高校生活
の思い出を書く欄でペンが止まる。

○走る電車・車窓（過去・晩秋のある日）
静かなギターの音色。曇天に鈍く光る
海が流れていく。

○高校・保健室・中
オレンジ色の赤外線ヒーター。
美原楓（28）、椅子に浅く腰掛け、素
足をヒーターに向けて、ぶらぶら揺ら
している。

日比野智子（28）、楓の後に立ち、楓の長い髪を止めているヘアピンを一つずつ外す。

色の違うヘアピンを、机の上にきれいに並べてゆく。

最後にヘアゴムをほどく。長い黒髪がすっと背中に落ちる。

智子、楓の顔をのぞき込む。いたずらのように笑顔を見せる。

楓「なんで笑うの」

智子「だって、美原先生が髪を解くと（と机から櫛と雑誌を取りながら）ほら、何だっけアレ」

楓「アレ？」

智子「……お化けの……髪の毛の長い」

楓「……？」

智子「テレビの中からさ、ずるずると出て来るやつ。四つん這いで」

楓「……なにそれ？」

智子「いたでしょ」

楓「知らない」

智子、櫛で楓の髪を梳き始める。楓、

あくびをしながら髪を預ける。

智子「一緒に見たんじゃない？」

楓「映画？」

智子「そう。恐がりのくせに見たい見たい言うからさ。私だって、あんまり得意じゃないのに」

楓「……（目を閉じている）」

智子「カーペットにジュースこぼしたでしょ」

楓「……」

智子「染み残ってんだよね、まだ」

窓辺のテーブルの、二客のティーカッ

プから糸のような湯気が立っている。

楓、ウトウトしている。

智子、雑誌をめくり、目印をつけておいたページを開く。

ヘアスタイルのカタログが載っている。

智子「ドレスでしょ」

楓「……ん？ うん」

智子、雑誌を参考にしながら楓の髪を
結び始める。

智子「上でまとめるよりさ、高めにひとつに
結って、こうやって、背中に垂らした方が
絶対いい」

楓「……」

智子「せっかく長いんだし。……。当日はプ
ロの人がちゃんとやってくれるんだろうけ
ど」

楓「切ろっかなあ……。ばっさり」

智子「えっ（と手を止める）」

楓「面倒なんだよね。何かと」

智子「ダメ」

楓「なんで？」

智子「ダメ」

楓、小さく咳をする。

智子、加湿器の用意を始める。

智子「ちよつと換気するか。窓開けて」

智子の背後で窓を開ける音。

楓オフ「日比野先生」

智子、楓の方を振り向く。

楓、裸足のまま窓辺に立ち、外の冷えた空気に白い息を吐いている。

楓「(智子に笑いかけて) ヒツジ」

智子、笑顔になりかけたのを隠すように楓に背中を向ける。

○同・三年生教室・中

窓から誰もいないベンチが見える。

未咲、一人教室に残り、ベンチを見ている。と、ドアの開く音。驚いて見返る。

天野俊二(18)、土まみれのラグビー部の練習着で教室に駆け込んでくる。

俊二「ビックリしたあ」

未咲「私もビックリした」

俊二、ロッカーへ行く。ばん創膏やらテーピングやらを引っ張り出し、床に座る。未咲、俊二の近くに来て、机の上座って何となく見ている。

俊二、未咲をちらちら気にしながら、
右手の指先にテーピングを巻き付ける。
やりにくそうにしている。

未咲「手伝う？」

俊二「いい」

未咲「マネージャーに頼めば？」

俊二「怪我したのがバレる」

未咲「ふうん（と俊二の足を見る）」

土まみれの足は、がちがちに鍛え上げ
られている。

未咲「すごいね、足。筋肉」

俊二「それでもねえよ」

未咲、スカートを少し上げて、生っ白
い自分の足と見比べる。

俊二、未咲の足が目に入って、目をそ
らす。

未咲「ラグビー部って、まだ引退しないんだ」

俊二「え？」

未咲「引退しないの？」

俊二「負けたら、引退」

とテープを歯で切り、さつさと片付けてロッカーに放り込み、教室を出て行く。こうとする。

未咲「急ぐ？」

俊二「うん。便所行くから」

未咲「私ってさ、どんな感じ？」

俊二「何が？」

未咲「性格とか。長所とか短所とか」

俊二「なにそれ？」

未咲「面接で聞かれるって」

俊二「就職すんの？」

未咲「うん。私って、どうかな」

俊二、答えに困って、指のテーピングをはがして、強く巻き直す。

未咲「……だよね」

俊二「なんだよ」

未咲「いい。部活頑張ってる」

俊二、指先のテーピングをいつまでもこそこそいじっている。未咲に向き直る。

未咲、席に戻って、帰り支度を始めて
いる。携帯電話を見ている。
俊二、走って出て行く。

○同・保健室・中

ノック。ドアがゆっくり開く。未咲、
顔をのぞかせる。

未咲「失礼します（と、中に入る）」
誰もいない。

窓辺のテーブルに二客のティーカップ
がある。一つは空で、もう一つは紅茶
が少し残っていて、縁にうすく口紅の
跡が残っている。

未咲、間仕切りのカーテンが閉まって
いるベッドに行く。カーテンを指先で
突つつく。

未咲「せいちゃん」

明子の声「渡部」

未咲、カーテンの中に入る。

明子、ベッドに横になって目を閉じて

いる。

未咲「前髪切った？」

明子「自分で切った。切りすぎた」

未咲「学校サボった罰だ」

と、ベッドの端にぼんと座る。鞆から就職希望者用面接練習シートを取り出す。

未咲「もらつといた」

明子「(ちらつと見て) いらね」

未咲、明子の顔の上に練習シートを置く。明子、ふつと息で吹き飛ばす。未咲、明子のお腹をぼんと小突く。練習シートを拾って折り畳み、明子のブレザーのポケットに突っ込む。

明子「なんて呼べばいいのかな」

未咲「なにが？」

明子「美原先生のこと」

未咲「学校辞めるんでしょ」

未咲、明子の膝の上辺りに、ぼんと仰向けになる。

明子「結婚だよ。楓ちゃんが」

未咲「おめでたいじゃん」

明子「プロポーズとかされたのかな。全然想像つかないよね」

未咲「ああ見えて意外と考えてんだよ。将来設計？ とか。わかんないけど」

明子、体を起こす。

明子「カーテン開けて」

未咲、ベッドを立つ。

明子「考えてる？」

未咲「わかんない」

明子「考えてるかどうか、はわかるでしょ」

未咲「……。わかんない」

明子「私も」

未咲、間仕切りのカーテンを開ける。

明子「紅茶の匂いがする」

未咲「高校の思い出ってある？」

明子「何で？」

未咲「就職の面接で聞かれるって」

二人、少し黙る。

明子「別にないね」

未咲「私も」

二人とも無意識に窓の外に顔が向く。

○走る電車・車窓（過去・晩秋のある日）

静かなギターの音色。曇天に鈍く光る
海が流れて行く。

○人のいない砂浜

オレンジ色のカイトがぼつんと空に浮
かんでいる。

明子、カイトの糸を持っている。未咲、
メガネをかけて、カイトを見上げてい
る。

オレンジ色のカイトは、薄曇りの空の
それほど高くないところで、ゆらゆら
と浮かんでいる。

明子、未咲ともに、オレンジ色のカイ
トとその向こうの空を、ただぼんやり
と見上げている。

砂浜にクリームコーンスープの空缶が
二つ刺さっている。

明子、未咲にカイトの糸を渡す。明子
も手伝って、二人で糸を伸ばしていく。
オレンジ色のカイトが、少し高いとこ
ろに浮かんでいる。
静かなギターの音色が続いている。

○高校・音楽室・中

楓、窓辺に座ってギターを爪弾く。

智子、肩越しにギターを聴きながら、

黒板をきれいに消している。

楓、弾くのをやめる。

楓「。 pasta。 この間作ってくれた」

智子「え？」

楓「あれ美味しかったな」

智子「なんだっけ？」

楓「美味しかった」

智子「ああ。 アンチョビのやつ」

楓「日曜日、行っていい？」

智子「(返事をしかけて)……」

楓「ちよつとき。ね。いい?」

智子「……。自分で作んなよ。簡単だから」

楓「料理じゃなくて。ちよつと」

智子、きれいになった黒板を見渡して、
ピアノの椅子に座る。

智子「料理したり買物したり、掃除したりする
のか。……想像できないよね」

楓、ひとつ笑って、ぼろぼろとギター
を爪弾く。

智子「いや、絶対無理でしょ。なんか、笑つ
ちやうもん」

楓「(黙って、笑う)」

智子「そうそう。無理だよ。笑っちゃう」

楓「(笑って、ギターを弾き続ける)」

智子「そのうち子供とかできたらさ、母親だ
よ。母親。お母さん。無理。どっちが子供

か、わかんないじゃん」

楓「(ギターを弾き続ける)」

智子「結婚なんかやめちゃえ」

楓「やめちゃうか」

智子、声を出して笑う。

楓、智子が笑っているのを見て、同じように笑って見せる。

* * *

しんとしている。明子、ドアを開けて入って来る。思わず立ち止まる。

楓、ひとりピアノの椅子に座っている。こちらに背中を向け、窓の方を向いている。肩越しにちらっと振り返る。

楓「ああ。来た」

明子「……誰かと思った」

楓「どうして？」

明子「髪」

楓「うん」

明子「めずらしいですね」

楓「家じゃいつもこうだよ」

明子「いや、部活に来るなんて」

と、奥の準備室へ向かう。窓辺に楓のギターが置きっぱなしになっている。

準備室に入り、自分のギターケースを
持って、出てくる。

楓、黙って窓の方を向いている。

明子「失礼します」

楓「帰るの？」

明子「はい。ギター、取りに來ただけなので」

楓「やってけば？」

明子「もう引退したから」

楓「誰も來ないんだけど」

明子「來ないですよ。後輩、みんな幽霊部員

だから」

楓「そうなの？ なんだ」

と、やっぱり黙って窓の方を向いてい
る。

明子「あの」

楓「ん？」

明子「ギター部ってどうなるんですか？」

楓「何が？」

明子「顧問は？」

楓「うーん……わかんない。誰かやるんじや

ないの？」

明子「適當」

楓「行きましょ。鍵閉めなきゃ」

二人、出ていこうとする。

明子「先生。ギター」

楓「あ」

楓、窓辺に置きっぱなしのギターを取りに戻る。

明子「苗字、変わるんでしょ？」

楓「うん」

明子「どんな感じですか？」

楓「うーん……別に」

明子「変えなくてもいいんでしょ？」

楓「そうなの？」

明子「ううん。知らないけど」

楓、ギターをケースにしまう。

明子「子供が産まれたら、どっちの苗字にするのかな？」

楓「どうなんだろうね」

明子「なんにも知らないんですね」

楓「知らないよ」

と、自分のお腹をさすりながら、

楓「おーい。君はどっちがいいんだ？」

明子「えっ？」

楓、ギターケースを持つて、出ていこ

うとする。明子、突っ立ったまま。

楓「ギター、続けるの？」

明子「えっ？ いや、別に」

楓「続けな。ね？」

明子「……。はい」

と、楓に続く。が、すぐ立ち止まる。

楓、察して、自分のお腹をさする。

楓「誰にも言わないでね」

明子、嬉しそうに拍手をする。

明子「（満面の笑みで）おめでとうございま
す」

楓、目を丸くする。

楓「……びっくりした」

明子「えっ、なんで？」

楓「だって……」

明子「(にっこりして拍手する)」

楓、続いて明子、音楽室を出ていく。

楓、ドアの鍵を閉めて、行く。

○同・外のベンチ

未咲、人待ち顔で座っている。クリームコーンスープの缶を二つ、手のひらの中で転がしている。缶を両の頬へ当てる。

俊二、未咲が向いているのと反対の方から走ってくる。部活を抜け出した様子で、未咲の前に立って、息を切らせている。

未咲、何事と思って、身を強張らせている。

俊二、なんとか呼吸を落ち着かせようとする。鼻の穴に詰め込んだちり紙に、鼻血が染みていく。

未咲「……大丈夫？」

俊二「うん(と指のテーピングを見せる)」

未咲「ううん。鼻」

俊二「あのさ」

未咲「えっ」

俊二「……」

未咲「……どうしたの？」

俊二「試合、見に来てくんないかな」

未咲「……試合？」

俊二「引退試合」

未咲「負けたら、でしょ」

俊二「すげえ強えんだよ」

未咲「そうなの？」

俊二「一八〇の百キロ、で東部選抜。俺の対

面」

未咲「ふーん。……熱っ」

と、両の頬に当てていた缶を落としそ
うになる。

俊二、鼻呼吸をしていると、ぽろつと
鼻に詰め込んだちり紙が落ちる。鼻血
がたれてくる。

未咲、慌ててバッグを漁って、ちり紙

を取り出す。鼻栓用に丸めて、俊二に手渡す。

俊二「すみません」

と、鼻に詰め込む。落としたちり紙を拾う。ばつが悪そうに未咲から顔をそむけて、そのまま逃げるように行こうとする。

未咲、クリームコーンスープの缶を差し出す。

未咲「あげる」

俊二、思わず缶を受け取る。その場にいられず、ちよこんと頭を下げて、歩いていく。

未咲「……あつ、試合ってどこでやる……」

俊二、聞こえず、走っていく。

未咲、俊二を見送る。バッグからメガネを取り出し、かける。

明子、離れたところから二人のやり取りを見ている。自分のギターケースと、楓のギターケースを持っている。

未咲、頬のあたりを手のひらでぱたぱたあおいでいる。明子、素知らぬ顔で来る。

明子「待たせたな」

未咲「ううん」

明子、未咲のとなりに座る。財布を取り出して、未咲に小銭を手渡す。

未咲「なに？ ……あつ、そっか」

と、コーンスープの缶を手渡す。明子、一口飲む。

未咲「私、飲んじやった。寒かったから」

明子、ぐいぐいとあおって、一気に飲み干す。

明子「ギター、いる？」

未咲「え？」

明子「（楓のギターケースを持って）美原先生がくれた」

未咲「うそ」

明子「いらなから、あげる」

未咲「ギターって、高いんじゃないの？」

明子「高いよ」

未咲「いらぬい」

明子「(ケースを開けてギターを取り出す)」

未咲「返してくれば？」

明子「もらえませんって何回も言ったのにさ、
受け取ってくれって。だって、泣きそうな
顔してんだもん」

未咲「美原先生が？」

明子「うん」

と、ギターを未咲に持たせて、ピック
を手渡す。コードを押さえる。

明子「弾いてみ？」

未咲、適当に弾いてみる。

未咲「おっ」

明子「きれいに出た」

明子、コードを変える。未咲、弾き続
ける。楽しくなってくる。

明子「ねえ」

未咲「ん？」

明子「なんでメガネかけてんの？」

未咲「メガネ？」

明子「うん」

未咲「……あ（弾くのをやめる）」

明子「外じゃ、かけないじゃん」

未咲「うん」

明子「だからさ、なんでかけてんのかなあつて。めずらしいなと思って。なにかあったのかな、って」

未咲、ぼかんと口を開けて、しばらく

黙考。明子、未咲からギターを受け取

り、調子良く爪弾く。

未咲「……猫」

明子「猫？ 野良猫？」

未咲「野良かどうかわかんないけど。たまに

このベンチで寝てんの」

明子「猫が？」

未咲「猫が」

明子「ホントに？」

未咲「ホントに。教室から見えるもん」

明子「……」

未咲「猫来るかなと思って、待ってたの。メガネかけて。だから」

明子、にやにや笑いが止まらなくなる。
ギターをしまつて、ベンチを立つ。

明子「帰ろ。コーンスープおごるわ」
と、歩いていく。

未咲、合点がいかにベンチに残る。
メガネを外し、明子を追う。

(おしまい)